

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：30117

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2023

課題番号：17K00767

研究課題名（和文）介護者のセルフケアプログラムの開発に関する実践的研究

研究課題名（英文）Practical Study on the Development of Self-Care Programs for Caregivers

研究代表者

風間 雅江（KAZAMA, Masae）

北翔大学・教育文化学部・教授

研究者番号：60337095

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：介護家族と介護職を対象としたセルフケアプログラムを開発し、対面・集団での実践研究を実施した。プログラムの内容は、個別のストレス・チェック、心理学的ストレス理論の概説、ポジティブ感情の効用の説明、マインドフルネス・アプローチの体験を主軸とし、介護家族はアンガーマネジメント、介護負担を軽くする情報提供を加え、介護職は感情労働、バーンアウトの理解と対処を加えた。さらに、ストレス・マネジメントを含むセルフケアに関するオンデマンド動画コンテンツを、介護家族向けと介護職向けに分けて複数作成し、オンライン心理支援ツールとして発信し、視聴者アンケート調査を実施したところ、全体的に有用性が高いという評価を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、介護家族と介護職がストレス・マネジメントを適切に行い、ウェルビーイングを維持・向上する上で有効なセルフケアのプログラムを開発し実践した。臨床心理学、健康心理学、ポジティブ心理学をはじめとした心理学の幅広い学術領域の最新の知見を参考にしてそれらを応用した実践研究としての意義があると考えられる。コロナ禍ではセルフケアに関するオンデマンド動画コンテンツを介護家族向けと介護職向けに作成し発信し、視聴者アンケートを通して有用性を確認した。今後さらに高齢化が進む現代日本において、介護者の心身の健康の維持・増進に貢献する知見を提出することができたと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study developed self-care programs for family caregivers and professional care workers and conducted practical research through face-to-face and group sessions. The program content primarily focused on individualized stress checks, an overview of psychological stress theories, the benefits of positive emotions, and experiences with mindfulness approaches. The program also included components on anger management and information on reducing the burden of caregiving for family caregivers. For professional care workers, the program added understanding and coping with emotional labor and burnout. Furthermore, we developed several on-demand videos with content related to self-care, including stress management, tailored separately for family caregivers and professional care workers. We disseminated these videos online as psychological support tools. Then, we conducted a viewer survey, that indicated the high efficacy of the videos.

研究分野：臨床心理学

キーワード：介護家族 介護職 セルフケア メンタルヘルス 心理教育 心理支援 マインドフルネス オンライン心理支援

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

現代日本の超高齢社会において、介護家族における介護負担感、疲弊、介護うつ、老老介護、介護職の人材不足、ケアハラスメント、高齢者虐待といった問題が社会的に注目されており、介護家族ならびに介護職が適切にストレス・マネジメントを行いつつ心身の健康を保ち、ウェルビーイングを維持向上させながら生活を送ることができるような支援方法を整備することは喫緊の課題である。

報告者らは、2012～2016 年度科学研究費助成事業（課題番号 24500904、研究課題名「介護家族と介護職における主観的ウェルビーイングの向上をめざす心理介入的アプローチ」）の一連の研究において、マインドフルネスが介護職の心理的ウェルビーイングに正の影響を及ぼすことを見出した。また、ストレス・マネジメントに関する心理教育とマインドフルネス・アプローチの実践指導等から成る介入プログラムを介護家族に実施したところ、介入前後の比較において有意な精神的健康度の改善が認められた。

本研究を開始するにあたり、上記の研究活動でこれまでに得た知見ならびに調査データをもとに、介護家族と介護職のストレスを効果的に低減し、心身の健康を増進するセルフケアのプログラムを、介護家族向けと介護職向けでそれぞれ開発、実践し、実証的に効果測定を行い、プログラムの有効性を検証することをめざした。

2. 研究の目的

本研究の開始当初の目的は、立案したセルフケアプログラムを介護家族ならびに介護職を対象に、集団および個別で対面形式にて実施し、介入前後の効果測定を行うものであった。しかし、本研究の対面での実践研究の途中、効果測定の実施前の 2020 年に新型コロナウイルス感染症の感染拡大の事態となり、対面でのプログラム実施が不可能となった。そこで途中から、本研究の目的を変更し、実証的な効果測定ではなく、すでに得た少人数の参加者の事後アンケートならびに過年度の調査データの再分析などの補足的な手段によって、プログラムの内容を精査することとした。

コロナ禍における非対面での心理支援法を開発することを新たな目的として、介護家族ならびに介護職それぞれを対象にした、オンライン心理支援ツールとして、オンデマンド動画コンテンツを作成、インターネット配信し、視聴者へのアンケート調査を通して、その有用性を検討することとした。さらに、研究者自身の介護家族としての体験を基に、自己エスノグラフィーの手法を用いて介護家族に求められる支援の在り方について検討した。

3. 研究の方法

(1) 介護家族を対象としたセルフケアプログラムについての研究

1) 介護家族対象のセルフケアプログラムの予備的検討として、過年度に実施したセルフケア講座の内容の精査、ならびに、そこで得たアンケート調査のデータ、および参加者の日常生活での実践記録について再分析を行った。プログラムの内容を精査し、バリエーションを加えたセルフケアプログラムによる実践研究を行った。

2) 新型コロナウイルス感染症拡大の事態により、介護家族のセルフケアに関する心理教育をオンライン支援として行うための動画コンテンツを作成し、YouTube でオンデマンド配信し、視聴者にオンラインでアンケート調査を行った。

3) 新型コロナウイルス感染症拡大により、当初予定していた研究計画の遂行が困難になったため、研究方法を変更し、分担研究者の介護家族としての体験を基にした自己エスノグラフィーによって、認知症や適応障害を基盤とする精神症状が家族にどのように波及するのか、障害者や認知症者の介護家族への支援の在り方について検討した。

4) 高次脳機能障害の当事者・家族会への継続的な参与および支援の実践、ならびに介護家族へのインタビューを通して、介護家族のセルフケアにかかわる情報を収集し考察を行った。

(2) 介護職を対象としたセルフケアプログラムについての研究

1) 介護職の心理的支援のニーズを明らかにするために、特別養護老人ホーム、グループホーム等に勤務している介護職を対象として前年度に実施したインターネット調査のデータを再分析ならびに追加分析を行った。

2) 日本介護クラフトユニオンが介護職を対象に実施したケアハラスメントの実態調査のデータ共有の許諾を得て、自由記述回答に対して訪問系サービスと通所・施設系サービスとに分けて質的分析を行い、その結果から、介護職のセルフケアプログラムを作成するための示唆を得た。

3) 介護職のウェルビーイングを高めるセルフケアプログラムを作成し、介護職を対象に対面・集団での実践研究を行った。

4) 介護職を対象としたセルフケアについてのオンデマンド動画コンテンツを、これまで得た

情報や知見に基づき作成し、高齢者福祉施設に勤務する介護職を対象に配信、視聴者アンケートを実施した。

(3) 介護者支援についての啓蒙活動

1) リハビリテーション医学および精神医学の観点から、介護家族および介護職のセルフケアに有効な専門知識ならびに体験から示唆する内容を、本事業の報告書として刊行した。他にも介護者のセルフケアについてわかりやすく説明する書籍の監修ならびに分担執筆や講演会等での啓蒙活動を行った。

2) 心理学の観点から、一般市民を対象とした講演会の講師として、介護家族のセルフケアにかかわる心理教育の実践活動を行い、事後アンケートを実施した。

同じく心理学の観点から、介護職を対象として、セルフケアおよび高齢者の自殺予防をテーマとした講演を行い、心理教育の実践活動を行い、事後アンケートを実施した。

4. 研究成果

以下に挙げる本研究で得た知見を、心理学、医学等の学術大会で発表および講演、ならびに学術論文で公表した。また、介護家族、介護職、介護施設運営者、介護福祉士養成課程学生、地域住民に対し、公開講座、研修会等において、本研究の成果を紹介し、助言や提言を行った。

(1) 介護家族を対象としたセルフケアプログラムについての研究

1) 介護家族対象のセルフケアプログラムの予備的検討として、2015年と2016年に実施したセルフケア講座の内容の精査、ならびに、そこで得たアンケート調査のデータ、および参加者の日常生活での実践記録について再分析を行った。こころとからだへの両側面へのアプローチとして、介護技法の説明および実習、ストレス・マネジメントについての心理教育、マインドフルネス・アプローチを基盤としたプログラムを実施し、介入前後で質問紙調査の結果を比較した研究において、心身の健康度が上昇していた。このプログラムは、2回に分けて実施され、心理学の知見を応用した「こころ編」(ストレスのセルフチェック、心理学的ストレス理論、バーンアウト、マインドフルネス・アプローチの説明と実践、アサーション)と「からだ編」(腰痛予防、ボディメカニクス、介護技術の実技指導、ストレッチング、体操)から成るものであり、ホームワークとしてマインドフルネス呼吸法の実践を推奨し、任意で記録シートへの記載を求めた。2018年度、上記のプログラムの内容を精査し、アンガーマネジメントの要素を加え実践研究を行ったところ、事後アンケートにおいて参加者の満足度が高かった。2019年度は、自分の心の状態へのメタ認知、心理学的ストレス理論ないし認知行動療法の観点にたつセルフケア方法の心理教育、マインドフルネス・アプローチの体験的理解、道具的サポートの一環として介護食の紹介、介護家族間でのグループディスカッション、といったプログラムを実施し、事後アンケートによる検討したところ参加者の満足度は高かった。

2) コロナ禍の状況において、2020年度より介護家族のセルフケアに関する心理教育をオンライン支援として行うための動画コンテンツを作成、YouTubeで配信し、視聴者へのアンケート調査を通して有用性を検討した。動画コンテンツは、前半51分、後半47分の2部構成で、前半は「超高齢社会と人生百年時代の現状」、「百寿者研究からわかったこと」、「老年の超越について」、「介護者のメンタルヘルスの研究からわかったこと」、「コロナ禍の理解と対応」、「ストレスの理解と対処」、「バーンアウトについて」、「リラクゼーション法について」、「ブリーフ・リラクゼーション法の体験」から成った。後半は「マインドフルネスについて」、「マインドフルネス呼吸法の体験」、「セルフ・コンパッションについて」、「共通の人間性(コモン・ヒューマニティ)について」、「ポジティブな人間関係とコミュニケーション」、「アサーションについて」、「アサーション度のチェック」、「精神的回復力(レジリエンス)について」、「生きぬくことと希望について」

(Frankl (1946)を参考)から成った。内容が広範に及んだが、わかりやすく紹介しながら日常生活に知識を活かす方法を具体的に説明した。視聴者からの質問にはメールで回答した。視聴者のアンケート結果では、動画コンテンツの全体評価については「大変良かった」と「良かった」を合わせて100%、わかりやすさについては「ちょうど良い」が73%、全体の有用性評価は「とても役に立つ」が64%、視聴時間については「長すぎる」が55.0%、「ちょうど良い」が45.0%であった。構成要素ごとの有用性評価を統計的に検討したところ、構成要素の要因に主効果は認められなかった。視聴者の関心には個人差があったが、ブリーフ・リラクゼーション法およびマインドフルネス呼吸法の体験において有用性評価が最大値の人数が82.0%で最も多かった。

上記の視聴者アンケートの結果をふまえて、2022年度に改正版の介護家族向けオンデマンド動画コンテンツを作成した。第1部ストレスの理解と対処(24分)、第2部ポジティブ心理学の活用(20分)、第3部マインドフルネスで心の平安を(24分)、の3部構成として、内容を示すタイトルをつけ1本の視聴時間を短くした。これらのオンデマンド動画コンテンツをYouTubeで配信し、視聴者アンケートを実施したところ、視聴者の満足度は高かった。

3) 高次脳機能障害者、認知症者、発達障害者の介護家族支援について、研究分担者自身の家族3人の介護体験を通して医学的見地から自己エスノグラフィによる検討を行った。その結果、要介護家族3人の経過は、互いに症状や処遇が影響し合っていることがわかった。経過と対応を仔細に検討したところ、介護家族を支援するプログラムの作成にあたっては、以下の8点について考慮すべきであると考えられた。①当事者の介護者（親・同法）には精神的な負担がかかっている、②介護者は精神的な負担について自覚はできない、③親亡き後の準備は当事者同胞では無力である、④介護者の過去を否定するようなアドバイスをしない、⑤介護者が親の場合には、相性のあうグループホームをみつけるよう導く、⑥介護者の試行錯誤を肯定する、⑦苦悩は人生の営みを深くすると介護者が自らの体験を肯定的に認識できるようにすること、である。

4) 北海道の高次脳機能障害（失語症、運動機能障害等）の当事者・家族会に参加し、求められる支援活動を実践しながら、当事者の語りを傾聴し、ビデオ記録およびフィールドノートにより、当事者と家族のニーズと支援者の在り方について考察した。また、関東圏の高次脳機能障害の当事者・家族会および認定健康増進施設において、高次脳機能障害（記憶障害）の当事者および関係者への長期にわたる医療分野での支援の実践を通して、記憶障害の生活支援および社会支援について検討を行い、その結果の一部を講演で発表した。さらに、リハビリテーション医学および精神医学の臨床で20年以上治療と支援にあたる外傷性脳損傷4事例を検討し家族の力および家族の支援を含め考察した論文を執筆した。

継続的に参加している当事者会の会員で、自身も障害をもちながら11年間にわたって家族の介護を行う女性にインタビューを行い、ナラティブ・アプローチを通して、ウェルビーイングを維持するためのセルフケアについて重要な示唆を得た。インタビューの全体を通して、「感謝」、「喜び」、「楽しい」、「満足」、「安らぎ」、「希望」といった、ポジティブ性を表す語句が、訪問介護や訪問リハ等の対人援助職による支援、友人との交流、接客対応、町内会活動への貢献等、他者とのかかわりをめぐる文脈を中心に数多く表現されていた。また、介護者自身が自分の人生を大切にすること、困った時にはそれを声に出すことの重要性が繰り返し語られていた。Fredrickson (2009) の拡張形成理論に照らすと、ポジティブ感情が生じることにより、適応的な思考や行動のレパートリーが広がり、建設的な人間関係の構築や社会的活動への意欲向上と実践が促進され、それらの実践を通して、アサーションを含む個人資源が継続的に形成され、主観的ウェルビーイングの向上と維持に繋がった可能性があると考えられた。

(2) 介護職を対象としたセルフケアプログラムについての研究

1) 介護職の心理的支援のニーズを明らかにするために前年度に介護職を対象に実施したインターネット調査のデータを再分析ならびに追加分析を行った結果から、心理職による心理的支援の必要性についての自己認識や、求められる心理介入方法（個別心理療法、集団心理療法、心理検査、心理教育等）について検討した。心理的支援が必要と回答した介護従事者は50%を占め、リラクゼーション方法の習得、個別心理療法等のニーズが高かった。さらに、感情労働としての感情調整がストレス反応を高めるという結果が示され、リラクゼーションやアンガーマネジメント等の心理教育の必要性が示された。

介護職において関心が大きい個別心理療法についての自由記述をデータとして、テキストマイニング分析を行った結果から、傾聴、感情への対処、職場の人間関係、などの主要概念が抽出され、個別支援、職場外支援のニーズが高く、傾聴重視か心理教育重視かでニーズが分かれた。心理アセスメントの重要性が再確認され、心理職による心理的支援のニーズについて新たな示唆を得た。

介護福祉士養成コースの大学生を対象に、ストレス・マネジメントについての心理教育を実施した。事後アンケートでは、心理学的ストレス理論、マインドフルネス呼吸法、セルフコンパッション等への関心の大きさ、および、心理教育で得た知識を介護実習中のストレス対処に活かすなど実用性の高さがうかがわれた。

2) 日本介護クラフトユニオンが介護職を対象に実施したケアハラスメントの実態調査のデータ共有の許諾を得て、自由記述回答に対して訪問系サービスと通所・施設系サービスとに分けて質的分析を行い、学会で発表した。通所・施設系に比べて訪問系において介護職が利用者・家族から精神的暴力を受ける比率が高く、介護職が単独で利用者宅に出向く状況でケアハラスメントを受けるリスクが高くなることが明らかになった。

3) 介護職のウェルビーイングを高めるセルフケアプログラムとして、心理学的ストレス理論、バーンアウト、感情管理、ポジティブ感情の効果、マインドフルネス・アプローチ（マインドフルネス呼吸空間法、レーズン・エクササイズ）から成るストレス・マネジメントについての心理教育のセルフケアプログラムを作成し、介護職を対象に集団での実践研究を試みた。プログラムの実施に先だち、心理介入プログラム担当者（報告者）が、日本マインドフルネス学会主催のオクスフォード大学マインドフルネスセンター講師陣による指導者養成集中セミナーに参加し、そこで習得した技法をプログラムに導入し、多彩な内容を展開した。セルフプログラムの実施後、

参加した介護職との間で活発な意見交換が行われ、新たな示唆が得られた。

4) 介護職を対象とした対面でのセルフケアプログラムの実践や、介護職を対象とした講演会でのアンケートの結果をふまえて、介護職のセルフケアについてのオンデマンド動画コンテンツを作成した。内容は、介護職におけるセルフケアの必要性、バーンアウトの予防、ストレスの理解と対処、ブリーフ・リラクゼーション法、マインドフルネス 3 分間呼吸空間法、アサーションを含む内容であり、視聴時間は 45 分であった。2023 年度、北海道内の高齢者福祉施設 4 施設に勤務する介護職にオンデマンド動画コンテンツを YouTube で配信し、動画の視聴とアンケート調査への協力を求めた。調査の結果は、動画コンテンツの全体評価については「大変良かった」と「良かった」を合わせて 90.5%、わかりやすさについては「とてもわかりやすい」と「わかりやすい」を合わせて同じく 90.5%、視聴時間については「長すぎる」が 45.2%、「ちょうど良い」が 54.8%であった。構成要素ごとの有用性評価を統計的に検討したところ、介護職におけるセルフケアの必要性、バーンアウトの予防、ストレスの理解と対処、アサーションが、ブリーフ・リラクゼーション法およびマインドフルネス 3 分間呼吸空間法に比べて評価が高く、先行研究からの予想と異なる結果であった。しかし、調査項目に含めた精神的健康度やストレス反応との関係を統計的に検討したところ、抑うつ・不安の高い人ほど、マインドフルネス呼吸法およびブリーフ・リラクゼーション法の有用性評価が高く、また、ストレス反応が大きく、抑うつ・不安の高い人ほど、動画コンテンツをわかりやすいと評価していることが示された。これらの結果から、介護職のストレス反応の高低を考慮した動画コンテンツを複数作成し、対象者の状況によって提供することにより、効果的な支援に繋がる可能性があると考えられた。

(3) 介護者支援についての啓蒙活動

1) リハビリテーション医学および精神医学の観点から、介護家族および介護職のセルフケアに有効な専門知識ならびに体験から示唆する内容を、介護家族への支援者向け、リハビリテーション医療関係者向け、認知症支援者・介護者向け、高次脳機能障害者支援者・介護者向けに分けて整理し、本事業の報告書として刊行した。また、介護職が現場で遭遇しやすい疾患・症状への具体的な対処方法、多職種連携のポイントなどについて、わかりやすく説明する書籍を監修した。他にも精神医学・精神医療についての書籍を分担執筆した。さらに、障害受容・障害適応についての総説論文を公表、および多職種連携について学会発表した。高次脳機能障害セミナーにおいて、精神科医の立場から家族支援を行った臨床実践をテーマとした講演を行った。

臨床心理学の専門書において、本研究で得られた知見をふまえ、臨床心理学およびリハビリテーション医学・精神医学の観点から、高齢者福祉および高次脳機能障害の章を執筆した。

2) 中高年齢層のメンタルヘルスをテーマとする講演会の講師として、高齢者介護の事例を交えながらセルフケアにかかわる心理教育の実践活動を行った。前年度までで扱ってきた、ストレスへの理解と対処、ブリーフ・リラクゼーション、マインドフルネス呼吸法、セルフ・コンパッション、アサーションなどを平易なことばと体験ワークを通して理解に導くことに加えて、2021 年度は新たに、マインドフルネス・ヨガ（座位での上半身のワーク）、老年的超越にいたる中高年齢期の生涯発達、コロナ禍およびウクライナでの戦争をめぐるメンタルヘルスの問題と対処も内容に取り入れた。参加者へのアンケートでは、こころの健康づくりに役に立つという回答が 96%、自由記述では国内外で惨事が続く事態にあってメンタルヘルスにかかわる心理教育へのニーズが高くなっていることがわかった。

介護職を対象として、セルフケアおよび高齢者の自殺予防をテーマとした講演を行い、介護職のストレス・マネジメントにかかわる理論、ブリーフ・リラクゼーション、マインドフルネス 3 分間呼吸空間法、セルフ・コンパッション、高齢者の自殺の現況、背景、特徴、予防、ゲートキーパーとしての役割、活動、具体的対応について心理教育の実践活動を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計30件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 17件）

1. 著者名 風間 雅江	4. 巻 9
2. 論文標題 介護家族のセルフケアに関するオンデマンド動画コンテンツの予備的検討	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 北翔大学教育文化学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 241-250
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24794/0002000125	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 風間 雅江・八巻 貴穂	4. 巻 15
2. 論文標題 介護職のセルフケアに関するオンデマンド動画コンテンツ作成の試み	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 81-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24794/0002000136	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 風間雅江	4. 巻 24（2）
2. 論文標題 ことばを超えて思いを汲み取る 障害臨床 -	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 臨床心理学	6. 最初と最後の頁 165-170
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 先崎章	4. 巻 34（12）
2. 論文標題 外傷性認知症者に対するケア、社会支援、就労支援	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 老年精神医学雑誌	6. 最初と最後の頁 1175-1184
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 先崎章	4. 巻 152(2)
2. 論文標題 高次脳機能評価	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本医師会雑誌	6. 最初と最後の頁 S88-S89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 風間雅江	4. 巻 86
2. 論文標題 介護家族のセルフケアに関するオンライン支援ツールの作成 オンデマンド動画コンテンツの予備的検討	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本心理学会第86回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 293
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 風間 雅江	4. 巻 45
2. 論文標題 介護現場における利用者・家族からのハラスメントをめぐる問題 - 日本介護クラフトユニオンによる実態調査の自由記述回答の分析を通じた検討	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 北海道心理学研究	6. 最初と最後の頁 72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20654/hps.45.0_72	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 先崎章	4. 巻 42
2. 論文標題 高次脳機能障害の世界をかいまみる 四半世紀診ている外傷性脳損傷者4名から学んだこと、10年前とこの10年	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 高次脳機能研究	6. 最初と最後の頁 251-257
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.2496/hbfr.42.251	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 先崎章	4. 巻 31
2. 論文標題 回復期・生活期リハビリテーション医療に必要な内科的管理 不穏・暴力・せん妄 向精神薬（抗精神病薬）の使用を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Clinical Rehabilitation	6. 最初と最後の頁 1442-1447
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 先崎章	4. 巻 59 (3)
2. 論文標題 リハビリテーション治療におけるモチベーション&アドヒアランス向上のために	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 The Japanese Journal of Rehabilitation Medicine	6. 最初と最後の頁 252-259
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.2490/jjrmc.59.252	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 先崎章	4. 巻 57 (10)
2. 論文標題 障害受容・障害適応を医療者は今どう位置づけるべきか - 本特集企画に込めた思いも含めて -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 The Japanese Journal of Rehabilitation Medicine	6. 最初と最後の頁 942-947
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.2490/jjrmc.57.942	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 風間雅江	4. 巻 21 (1)
2. 論文標題 ケースを査定する 心理検査	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 臨床心理学	6. 最初と最後の頁 16-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 風間雅江	4. 巻 19(4)
2. 論文標題 高齢者福祉	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 臨床心理学	6. 最初と最後の頁 434-436
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 風間雅江	4. 巻 83
2. 論文標題 介護職の心理的支援のニーズについての探索的検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本心理学会第83回大会論文集	6. 最初と最後の頁 415
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 風間雅江	4. 巻 58
2. 論文標題 介護職における心理療法のイメージ - テキストマイニングによる自由記述の分析を通じた検討 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 北翔大学短期大学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 33-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 先崎章	4. 巻 49(3)
2. 論文標題 精神科臨床における意識障害 せん妄ともうろう状態を中心に 注意障害の評価法	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 臨床精神医学	6. 最初と最後の頁 335-340
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 先崎章	4. 巻 29(3)
2. 論文標題 社会的行動障害へのアプローチ 意欲・発動性の低下の病態と治療法	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Clinical Rehabilitation	6. 最初と最後の頁 238-246
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 風間雅江・本間美幸・八巻貴穂	4. 巻 4
2. 論文標題 介護従事者に求められる心理的支援とは何か	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 北翔大学教育文化学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 57-65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24794/00002744	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 風間雅江	4. 巻 82
2. 論文標題 介護家族を対象としたセルフケア・プログラムの実践研究 マインドフルネス・アプローチを導入した試み	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本心理学会第82回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 349
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 風間 雅江	4. 巻 41
2. 論文標題 介護職における心理的支援のニーズ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 北海道心理学研究	6. 最初と最後の頁 55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20654/hps.41.0_55	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 先崎章・稲村稔	4. 巻 88(6)
2. 論文標題 注意障害の評価法	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 神経内科	6. 最初と最後の頁 648-653
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 町田真理子・先崎章	4. 巻 18(6)
2. 論文標題 高次脳機能障害の評価	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 臨床心理学	6. 最初と最後の頁 674-676
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 風間雅江	4. 巻 81
2. 論文標題 マインドフルネスが介護職の主観的幸福感に及ぼす影響	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本心理学会第81回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 316
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 風間雅江	4. 巻 18(4)
2. 論文標題 高次脳機能障害ケア	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 臨床心理学	6. 最初と最後の頁 460
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 風間雅江・本間美幸・八巻貴穂	4. 巻 3
2. 論文標題 介護職におけるマインドフルネスと主観的幸福感の関係	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 北翔大学教育文化学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 47-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Akira SENZAKI	4. 巻 8
2. 論文標題 Significance of using certified health promotion facilities for people with memory disorders caused by brain injuries	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 茶屋四郎次郎記念学会誌	6. 最初と最後の頁 77-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 先崎章	4. 巻 55
2. 論文標題 運動療法の可能性 高次脳機能障害 (外傷性脳損傷や脳卒中などによる)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 The Japanese Journal of Rehabilitation Medicine	6. 最初と最後の頁 198-205
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 先崎章	4. 巻 55
2. 論文標題 リハビリテーション患者のうつにどう対応するか	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 The Japanese Journal of Rehabilitation Medicine	6. 最初と最後の頁 143-151
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 先崎章	4. 巻 54
2. 論文標題 復職の支援 高次脳機能障害	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 The Japanese Journal of Rehabilitation Medicine	6. 最初と最後の頁 270-273
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 先崎章・菅野裕太郎	4. 巻 26 (13)
2. 論文標題 リハビリテーション領域における心理専門職 神経心理学的障害 (高次脳機能障害) 者の評価と支援	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Journal of Clinical Rehabilitation	6. 最初と最後の頁 1256-1260
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計21件 (うち招待講演 12件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 風間雅江
2. 発表標題 介護家族の語りにもみるポジティブティ
3. 学会等名 北海道心理学会第70回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 風間雅江・八巻貴穂
2. 発表標題 介護職のストレス・マネジメントに関するオンライン支援ツールの開発 オンデマンド動画コンテンツの検討
3. 学会等名 日本心理学会第88回大会 (発表登録済)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 先崎章
2. 発表標題 患者のこころの問題に対するリハビリテーション医療現場での苦悩 高次脳機能障害者、他の障害者、家族の心理面にリハビリテーション科医師はどう対応するのか、しないのか
3. 学会等名 第60回日本リハビリテーション医学会学術集会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 風間雅江
2. 発表標題 介護家族のセルフケアに関するオンライン支援ツールの作成 オンデマンド動画コンテンツの予備的検討 -
3. 学会等名 日本心理学会 第86回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 風間雅江
2. 発表標題 介護現場における利用者・家族からのハラスメントをめぐる問題 - 日本介護クラフトユニオンによる実態調査の自由記述回答の分析を通じた検討
3. 学会等名 北海道心理学会・東北心理学会第13回合同大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 風間雅江
2. 発表標題 高齢者支援におけるゲートキーパーの役割と支援者のセルフケア
3. 学会等名 江別市令和4年度介護職員向け自殺予防ゲートキーパー養成研修会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 先崎章
2. 発表標題 家族もみてきた精神科医の立場から、家族がつかれすぎないために
3. 学会等名 千葉県千葉リハビリテーションセンター 高次脳機能障害セミナー（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 先崎章
2. 発表標題 自分と相手を助ける心理学&精神医学、専門性を高め志の初心に戻る
3. 学会等名 国際医療福祉大学 成田保健医療学部 言語聴覚学科 卒後研修会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 先崎章
2. 発表標題 高次脳機能障害の世界をかいまみる 四半世紀診ている外傷性脳損傷者5名から学んだこと 10年前までとこの10年
3. 学会等名 第45回日本高次脳機能障害学会学術総会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 風間雅江
2. 発表標題 介護職における心理的支援のニーズに関するテキストマイニングを通じた検討
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 先崎章
2. 発表標題 リハビリテーション多職種チームにて専門職が生き生きと働くために
3. 学会等名 第10回日本リハビリテーション栄養学会学術集会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 風間雅江
2. 発表標題 介護職の心理的支援のニーズについての探索的検討
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 風間雅江
2. 発表標題 介護家族を対象としたセルフケア・プログラムの実践研究 マインドフルネス・アプローチを導入した試み
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会発表論文集
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 風間雅江
2. 発表標題 介護職における心理的支援のニーズ
3. 学会等名 北海道心理学会第65回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 先崎章
2. 発表標題 精神科リハビリテーションの過去、現在 その背景にある日本の精神医療の事情 身体リハビリテーションに活かせることも含めて
3. 学会等名 第54回日本リハビリテーション医学会学術集会（教育講演）（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 先崎章
2. 発表標題 高次脳機能障がい者のスポーツ活動
3. 学会等名 第39回日本リハビリテーションスポーツ学会（基調講演）（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 先崎章
2. 発表標題 高次脳機能障害者のアドヒアランスをどう高めるか
3. 学会等名 第2回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 先崎章
2. 発表標題 運動療法の可能性 高次脳機能障害、認知症の予防、うつ病
3. 学会等名 第2回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 風間雅江
2. 発表標題 マインドフルネスが介護職の主観的幸福感に及ぼす影響
3. 学会等名 日本心理学会第81回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 先崎章
2. 発表標題 全般性注意障害のリハビリテーション 記憶障害などの他の認知機能との関連も含めて
3. 学会等名 第54回日本リハビリテーション医学会学術集会 教育講演（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 先崎章
2. 発表標題 身体障がい者とうつ状態 リハでの対応も含めて
3. 学会等名 第54回日本リハビリテーション医学会学術集会 教育講演（招待講演）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 先崎章	4. 発行年 2024年
2. 出版社 東京福祉大学 社会福祉学部	5. 総ページ数 193
3. 書名 介護者のセルフケアプログラムの開発に関する実践的研究 高次脳機能障害者、認知症者、発達障害者の介護者・家族支援 医学的見地より 分担研究報告書	

1. 著者名 岩壁茂他（編） 先崎章（第10部3高次脳機能障害）、風間雅江（第17部4高齢者への支援）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 金剛出版	5. 総ページ数 1028
3. 書名 臨床心理学スタンダードテキスト	

1. 著者名 先崎章（監修）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 羊土社	5. 総ページ数 247
3. 書名 PT・OTビジュアルテキスト精神医学	

1. 著者名 先崎 章・安西 順子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 中央法規出版	5. 総ページ数 159
3. 書名 よくある場面から学ぶ疾患・症状への対応（ステップアップ介護）	

1. 著者名 一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟 先崎章（第2章代表的な精神疾患）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 中央法規出版	5. 総ページ数 354
3. 書名 精神保健福祉士養成講座1 精神医学と精神医療	

1. 著者名 江藤文夫（監修）和田直樹（編集）先崎章（高次脳機能障害のリハビリテーション）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 南山堂	5. 総ページ数 320
3. 書名 神経疾患のリハビリテーション	

1. 著者名 武田克彦・三村将・渡邊修（編集）先崎章（全般性注意障害）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 医歯薬出版	5. 総ページ数 416
3. 書名 CR BOOKS高次脳機能障害のリハビリテーションVer.3	

1. 著者名 緑川晶・山口加代子・三村将（編集）先崎章（症候の理解 社会的行動障害）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 医歯薬出版	5. 総ページ数 240
3. 書名 臨床神経心理学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	先崎 章 (SENZAKI Akira) (20555057)	東京福祉大学・社会福祉学部・教授 (32304)	
研究分担者	本間 美幸 (HONMA Miyuki) (30295943)	北翔大学・生涯スポーツ学部・准教授 (30117)	2020（令和2）年度迄

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	八巻 貴穂 (YAMAKI Takaho) (30364293)	北翔大学・生涯スポーツ学部・准教授 (30117)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関